

最古の日本映画について 小西本店製作の活動写真

入江 良郎

はじめに：映画の渡来と日本製活動写真の公開

我が国の映画史が、海外の発明品であるエジソンのキネトスコープやヴァイタスコープ（米）、リュミエール兄弟のシネマトグラフ（仏）の渡来によって幕を開けたことは周知の事実である。それでは、最初の日本映画はいつ、誰によって撮影されたのであろうか。

上記の発明品では最も古い、覗き式のキネトスコープが神戸で初めて公開されたのは明治29（1896）年のことであったが、早くもその番組の中に、「京都祇園新地芸妓三人晒布舞ノ図」というタイトルが含まれていたことはよく知られている。しかし、このフィルムはエジソンのスタジオ「ブラックマリア」で撮影されたものであり、出演しているのは明治26（1893）年のシカゴ博覧会に参加するために渡米した芸妓たちの一部といわれている。また、翌年の明治30（1897）年にはシネマトグラフの上陸に伴い、日本国内でも初めての映画撮影が行われているが、これらはリュミエール社の派遣で機械とともに来日したフランス人技師、コンスタン・ジレルによって撮影されたものである。

一方、写真材料商の小西本店（後に小西六写真工業、現コニカミノルタ）が『写真月報』誌上に「活動写真器械の到着」という見出しの広告を掲載し、バクスター&レイ（英）と思われる撮影機の輸入を告知したのは明治30年10月のことであったが、このとき同店の店員であった浅野四郎は到着した機械の扱いを任せられ、日本人としては初めて活動写真の撮影、現像、焼付に成功したと言われている。また、当時ヴァイタスコープの興行で成功を収めていた廣目屋がこれに目をつけ、いよいよ本郷中央会堂や歌舞伎座などで日本製活動写真の興行に乗り出したのは明治32（1899）年6月のこと。これが一般に日本映画の最初の公開とみなされているものである¹⁾。

それでは、このとき小西本店＝浅野四郎が撮影したフィルム、あるいは廣目屋が公開したフィルムとは、一体どのようなものだったのだろうか。しかしながら、既に当時のフィルムが全て散逸しているうえに、残された記録類も限られているため、現在ではそれらの正確なリストを作成することも、個々のフィルムの内容を詳しく説明することも、極めて困難と言わざるを得ないのが実情である。このことは、「初めて日本人を写した」エジソン社のフィルム、あるいは「初めて日本で撮影された」リュミエール社のフィルムが現在もそれぞれの製作国で保管され、後代の鑑賞に耐えていることとは対照的である。

記録と聞き書き :《日本映画のルーツ》をめぐる二つの情報源

日本映画の始まりに関するこれまでの記述は、おおむね二種類の情報源に依拠して書かれたものと考えてよい。その一つは、当時の新聞記事や広告などの記録類であり、それらの中でも特に有名なのは明治32年の報知新聞に掲載された広告の、次のような記述である(以下、引用文は一部の固有名詞を除き新字に改めた)。

成功日本写真概略左に御披露申上候 銀座街 日本橋首街 浅草仲見世 芸妓手踊「新橋の部」長唄花月の四季(薫小松家おえん、沼田家おえつ、地方福松家すま子、新川村家小蝶)紅葉の橋(武蔵家あたり、福中村家六助)長唄鶴亀(薫小松家おえん、翁家小いな、松の家おえつ)新鹿子(日の家ばたん、沼田家兼子)端唄背戸の だん畑(鈴木家小竹)「柳橋の部」端唄松尽し(立花家小静、地方若松家なつ、上総家やを)元禄花見踊(小若松家喜代治、新中の家よし、地方若松家なつ、上総家やを、鳴物内田家柳子)「芳町の部」かつばれ(浜田家五郎、萬屋小千代、三輪屋錦糸)「京都祇園の部」潮来出し(祇園町一力楼まさ子、かよ)道成寺(同小きみ、久鶴、勝龍) 其他略

報知新聞(明治32年7月13日付)

すなわち、日本映画の上映番組を記した現存最古の資料である。ここから、初期の日本映画が街の風景や芸妓の手踊りを題材にしていた様子をうかがうことができる。ただしこの広告は、同じ廣目屋の興行でも6月に本郷中央会堂(6月13日 - 17日)や歌舞伎座(6月20日 - 7月5日)で行われたそれよりも後、7月の明治座の興行(7月14日 - 31日)に際してのものであり、従って番組の内容が初公開時のそれとどの程度重複し、どの程度異なるのか定かではない⁽²⁾。また、上記の番組には浅野四郎の他に柴田常吉や白井勲造(また一説に光村利藻)が撮影したフィルムが含まれているとの見方もあるが、それも後で見るように、撮影者の特定や個々のフィルムとの対応関係について、はっきりとした結論が出ているわけではない。

もう一つの資料は、浅野四郎ら当時の関係者が生前に残した回顧談である。特に有名なのは、1940年に『キネマ旬報』に掲載された、浅野四郎や小西本店関係者を囲む座談会の記事、ならびに1955年に日本アマチュア・シネ・スライド協会(小西六写真工業内)発行の『NACSA NEWS』に掲載された座談会の記事であるが、これらの他に映画史家の田中純一郎も、浅野四郎や柴田常吉、光村利藻の生前に取材を行い、その談話を著作の中で紹介している。「日本橋」や「芸者の踊」を撮影した当時の苦心談、「トリック撮影」や「芝居のようなもの」の撮影を試みた話などの有名なエピソードはこれらの談話を大もとの出典とするものであり、またその中には新聞記事には記載のないフィルムの話も多く含まれている。しかし、証言者の記憶だけを頼りとする回顧談の常として、これらの資料

も談話に登場するエピソードの前後関係や、それぞれのフィルム撮影時期など年代の特定には決め手を欠くところに限界があり、そのため撮影機の到着を示す広告が現れた明治30年10月の前後から日本映画の興行が初めて行われる明治32年6月まで、約1年8か月の間の出来事については、いまだ十分な説明がなされたといえない。

このように、《日本映画のルーツ》や《最古の日本映画》については、入手できる情報そのものが限られているうえに、わずかな情報の中にも多くの注釈や但し書きを必要とするのが実情であり、その全体像はいまだ謎に包まれたままである。

ところで、これから本稿で取り上げてみたいのは、上記のような記録や聞き書きとも異なる、あるもう一つの資料のことである。それは、今日の映画史研究ではほとんど注目されることのない資料であるが、にもかかわらず、おそらく映画史に関心のある者なら誰もが一度はそれを目にしたことがあるのではないかとも思われる。すなわち、浅野四郎たちが撮影したといわれるフィルムの写真図版のことである。

田中純一郎の『日本映画発達史Ⅰ』（中央公論社、1975年）を見てみよう。同書の第四節「初期の映画製作」の中には「日本橋橋畔の活動写真」「芸者の手踊り」と書かれた二つの写真図版が掲載されており、また後者には「日本製映画の第一回興行」という説明も付されている（pp.72-73）。だが、これらの写真図版は一体何を原版としているのであろうか。というのも、一般に現存最古の日本映画とされているのは、明治32年11月頃に柴田常吉が撮影した九代目団十郎と五代目菊五郎の「紅葉狩」であり、従ってそれ以前のフィルムは全て散逸したものと考えるのが自然だからである³⁾。

しかも、同書には図版それ自体の由来や素材の出典に触れたところがないため、正直なところ果たしてそれらが正当な裏付けに基づいた資料なのかどうか、以前には疑わしい気持ちにとらわれたことがあるのも事実である。ところが最近、これと関連するいくつかの資料に接するうちに、今度は問題の図版が、まさしく浅野らの撮影したフィルムから複写されたものではないかという考えを強くするに至ったのである。

もうひとつの資料：写真図版とその出処

これまでに筆者が目にした資料とは、次のようなものである。一つは、『キネマ旬報』1940年1月1日号（702号）に掲載された「四十年前の撮影機と撮影を訊く」という記事である。これは「大塚四郎」こと浅野四郎その人を招いて初めて開かれた戦前の座談会を採録したもので、出席者には小西六の重役で、かつて浅野の映画撮影にも関わった杉浦六右衛門（七代）杉浦千之助、杉浦宗次郎も名を連ねている⁴⁾（当時浅野は「大塚」に改姓。本稿では記事の引用やその出典を示す場合を除き、小西本店在籍当時の浅野姓に統一して表記する）。その誌面には、既に『日本映画発達史Ⅰ』の「日本橋橋畔の活動写真」と同一カットの図版が見られるうえ、ここではさらにはっきりと「大塚氏撮影の日本最初の映画『日本橋』」というキャプションも記されている。

もう一つは、同じく戦中の1939年に日本橋高島屋で開催された「映画法実施記念 映画文化展覧会」(大日本映画協会主催)の出品目録である。その中に「大塚氏作品齣及其の拡大写真」なる展示品の記載が見られるのである。以下に目録の一部を抜粋してみよう。同目録は映画史年表をたどる形式で書かれており、年代などには現在の視点から疑問の余地のある記述も見られるが、そのまま引用する。先頭に 印を付し出品者の記載のあるものが実際の展示品である。

最初の撮影

明治三十一年(これも明治二十八年説強し、即ち明治二十八年夏撮影し、フィルムなかりし為翌二十九年陽画に焼付けたりとの説なり)東京小西商店の大塚(当時浅野姓)四郎氏及三越の柴田常吉氏により撮影さる。

大塚氏作品齣及其の拡大写真 中村正俊氏

「芸妓の布晒し」「隅田川」「浅草観音」「浅草江川一座」「日本橋」

右は明治二十八年撮影説

「奇術」

右は明治二十九年撮影説

リュミエール会社技師ベール氏持参及撮影映画齣及其の拡大写真 中村正俊氏

「ドーヴァ海峡の荒浪」

「巴里風景」

「東京附近の農村」

右は明治三十年説

柴田常吉氏作品齣及其の拡大写真 中村正俊氏

「ある舞台面」

右は明治三十二年撮影説

尚ほ前記の他神戸光村利藻氏により撮影されたるものとして左の如きものがあるといふ。

「潮来出島」

「車屋の水喧嘩」

「撃剣」

『映画法実施記念 映画文化展覧会記録』(大日本映画協会、1940年)

展示品の中には、大塚(浅野)が撮影したという「日本橋」や「芸妓の布晒し」などのフィルムが合わせて6点、さらには柴田常吉が撮影したという「ある舞台面」なるフィルムや、小西本店がガブリエル・ヴェールの訪問を受けた際に入手したと思しきリュミエール社のフィ

ルム3点も含まれている。また、出品者の中村正俊は『キネマ旬報』の座談会にも出席していた小西六の社員であり、後には「活動写真器械の到着」の広告(小西本店に撮影機が輸入されたことを示す資料)を『写真月報』の中から発掘したことで知られる人物である。

つまり、先の図版は展覧会に出品された「作品齣(フィルム齣)を大もとの原版とするものではないか、またこれらのフィルム齣は当時健在だった浅野自身や小西関係者への取材を通して発掘されたものとするのが自然ではないだろうか。

そこで今度は、過去に同様の図版を紹介した文献はどのくらいあるのか、改めて調べてみると、さらに興味深い事実が浮かび上がってくる。すなわち、先の『日本映画発達史I』の他にも、筈見恒夫『写真映画百年史』第1巻(1954年)や『キネマ旬報臨時増刊 目で見る日本映画の六十年(1958年)など、かつての基礎的な映画文献には「日本で最初に撮影された映画」あるいは「浅野四郎氏撮影の」「柴田常吉が撮影した」などの解説を付けた図版が繰り返し掲載されていたことが判るのである。また、それらの中には同じ図版の使い回しや先行する文献からの孫引きと思しき図版も目立つが、その一方で、実は想像以上に多くの種類の図柄の写真が存在していたこと、とくに「芸者の手踊り」などと呼ばれている図版ひとつをとっても、その中には様々なヴァリエーションの図柄が存在していたことが判る。なお、これらの文献では最も早い時期のものと思われる田中純一郎の「日本の映画技術史に関する覚え書 其の1 撮影機の第一着(『映画技術』1942年11月)には次のような謝辞が書かれていることも確認することができた。「本号挿入写真に就いては、小西六本店の中村正俊氏の御好意に依る所多し」。これは、図版と展覧会の出品資料との結びつきを具体的に示す資料といえるだろう。

初期日本映画のイメージ：フィルム齣が語るもの

こうしてみると、問題の「作品齣」が、ある世代までの映画史家や映画評論家の間では広く知られた存在であったことが想像されるのだが、かつて「映画法実施記念 映画文化展覧会」などに出品された初期映画資料も、現在ではその大半が行方不明になっており、この「作品齣」のような資料が発掘された事実さえすっかり忘れ去られようとしているのは残念である。

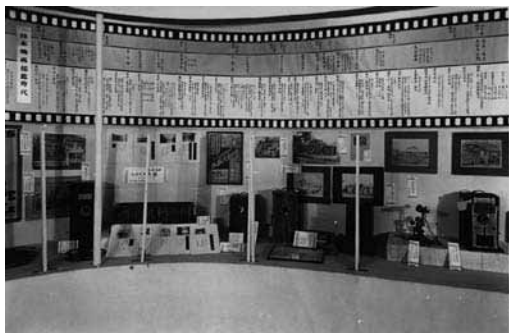
それはともかく、これらの「作品齣」や写真図版についてはその後の調査で次のような手がかりを得ることができた。一つは、フィルムセンターが所蔵している「映画法実施記念 映画文化展覧会」の記録写真である。これと同じものは同展の目録(『映画法実施記念 映画文化展覧会記録』)にも掲載されているが、その中に問題のフィルム齣が写っているのかどうか、印刷図版ではいまひとつ判然としなかったものが、あらためて紙焼の写真を調べると、確かにそこには、それぞれのフィルム齣が拡大写真とともに台紙に貼られて陳列されている様子が、はっきりと写し出されている(図A、B)。また「日本最初の撮影フィルム」というキャプションや、それぞれの展示品に付された解説の文字がおぼろげながら判読できるうえ、各フィルムの「拡大写真」の図柄や、さらには当時「作品齣」がどの程度の

分量まで残存していたのかも明らかにすることができた。なお、この「作品齣」は1940年に大阪高島屋で開かれた「映画法実施記念 映画報国展覧会」(キネマ旬報社主催)にも同じ内訳で出品されており、これらについても同様に、フィルムセンターが所蔵する記録写真の中に当時の展示風景を確認することができた。

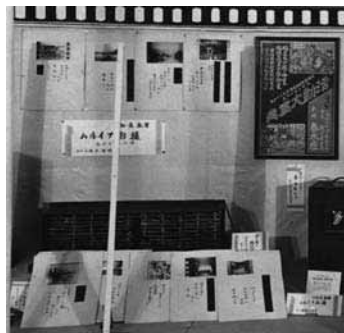
また、こうして集められた写真図版を眺めているうちに、ようやくはっきりとしてきた事実がある。例えば、これまで「芸者の手踊り」などと総称されてきたフィルムは、ほとんどが書のようなものを掲げた壁を背景に数名の芸妓たちの舞踊を撮影したもので、一見どれも似たり寄つたりの内容、図柄となっている。しかし、あらためてこれらと比較してみると、それぞれの背景や、芸妓たちの持ち道具には明らかに異なる特徴があることや、また反対に、いくつかのフィルムは明らかに同じ場所で撮影されたものであることが判るのである。

そして、さらに重要な事実は、背景に書かれた文字は印刷された図版上でも判読が可能であり、そこに書かれているのは「開花楼」や「花月楼」といった料理店(料亭)の名前、つまり個々のフィルムが撮影された場所を示しているということである。これらのフィルムが当時の著名な料理店で撮影されたことはよく知られているが、後で触れる浅野の談話からも判るように、実際の撮影は座敷ではなく(当時のフィルムの感度や照明技術の問題から)その庭先で行われたのであり、従って背景の文字はその都度、撮影に使われた料理店の名前を観客たちに知らせる目的で掲示されたものと思われる。これは説明字幕などの表現技術がまだ確立していなかった映画草創期ならではのエピソードとしても興味深いものであるが、しかし結果的には、そのような特殊な事情があったおかげで、僅か1コマの画面の中にも、フィルムの身元に関わるような重要な手がかりが残されていたことになる。

それでは、これらの図版の分析を進め、あるいは展覧会に出品された「作品齣」のタイトルや過去の文献資料の記述と照合することで、《最古の日本映画》の姿をある程度まで明らかにすることができるのではないだろうか。以下では、実際に採集した写真図版の一つ一つを見ながら、情報の整理を試みることにしたい。



図A:「映画法実施記念 映画文化展覧会」会場風景



図B: 左の写真の一部を拡大したもの

《最古の日本映画》一覧

凡例

- ・写真図版の採録にあたっては、それぞれの出典となる文献の書誌情報とともに図版に付された初出時のキャプションをそのまま転記した。
- ・上記キャプションは、カッコなどの記号や年代の記載方法を含めて各文献上の表記を原文どおりに転記しているが、旧漢字は全て新字に改めた。また[]内は本稿執筆者による註釈である。
- ・同一の映画フィルムを原版とする写真図版が複数の文献に掲載されている場合には、その中で特に画質がすぐれていると思われるもの一点のみを選び転載した。

A. 展覧会出品の資料

「映画法実施記念 映画文化展覧会（大日本映画協会主催、1939年）および「映画法実施記念 映画報国展覧会（キネマ旬報社主催、1940年）」に出品されていたフィルム齣は次の通りである。いくつかの図版は映画史の文献でも繰り返し取り上げられているので記憶のある読者も多いだろう。

【図1】 展覧会出品時のタイトルは「日本橋（「大塚氏作品」）。会場の記録写真を見る限りでは当時2コマ程度が残存していたようである。『写真映画百年史』には「銀座街」と記されているが、これは明治座の番組表（明治32年7月13日付報知新聞掲載の広告）に記載された次の2つを混同したものである。

銀座街
日本橋首街

また、『目で見る日本映画の六十年』に「岩谷商店が広告用に製作した映画」とあるのは、『映画法実施記念 映画文化展覧会記録』の年表にも書かれている「最初の広告写真（「明治三十二年東京赤天狗の岩谷松平氏が銀座を背景として作製せりといふ）」のことを指していると思われるが、これもどのような理由で混同されたのか不明である。上記の写真が日本橋を写したもので（南詰東側、京橋方面から撮影したもの）で



【図1】

[出典]

- ・大塚氏撮影の日本最初の映画「日本橋」
「四十年前の撮影機と撮影を聞く」『キネマ旬報』702号（1940年1月1日）p.148
- ・銀座街
筈見恒夫『写真映画百年史』第1巻（鱗書房、1954年）p.7
- ・日本橋橋畔の活動写真（明治三十年）
田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ』（中央公論社、1957年）p.65
*同じ著者の『日本映画発達史Ⅰ』（中央公論社、1975年および1980年）にも同一の図版あり
- ・「銀座」 岩谷商店が広告用に製作した映画
『キネマ旬報臨時増刊 目で見る日本映画の六十年』（1958年）p.16
- ・[浅野四郎が 明治三十年初めて撮した日本橋
小林源次郎『私の映画史』『グラフ三多摩』第25号（1980年1月1日）p.20

あることは、現存する他の古写真と比較しても明らかである(『開橋記念日本橋志』東京印刷、1912年 等を参照)。なお、日本橋が現在の石造アーチ橋に架け替えられるのは明治44(1911)年である。

日本橋のフィルムは、浅野四郎が撮影機の到着後初めて完成したフィルムの一つとして知られているが、果たしてこれが、そのときのフィルムなのか、また明治座で上映された「日本橋首街」と同じものなのか、現時点では判断ができない。後で示すように、「日本橋」の街中で撮影されたフィルムが他にも存在するからである。以下は浅野四郎の証言。「ネガテイヴを三尺試験し、五尺試験し二巻位は費つてしまつて、結果を見て、これでいゝといふのでどつちか撮らうと、残りのフィルムで日本橋を撮るとか、浅草の観音様を撮るとか、四巻位出来ました。」「四十年前の撮影機と撮影を訊く」『キネマ旬報』1940年1月1日 702号】。

【図2】 展覧会出品時のタイトルは「芸妓の布晒し」(「大塚氏作品」)で、記録写真(「映画法実施記念 映画報国展覧会」)を見る限りでは当時5コマ程度が残存していたようである。

写真の背景に見えるのは「開花楼」の文字である。開花楼は神田区の宮本町一番地(現在の千代田区外神田二丁目) 明神男坂にあった料理店。浅野四郎は座談会の中で「講武所では『勢獅子』を撮りました。『布ざらし』も撮りました(「四十年前の撮影機と撮影を訊く」)と証言しているので、このときに旅籠町の芸妓(いわゆる「講武所芸者」)を開花楼に招いて撮影したのではないだろうか。なお田中純一郎は図版の説明を後年、「浅野四郎氏撮影」から「柴田常吉撮影」に改めているが、どのような理由によるものであろうか。



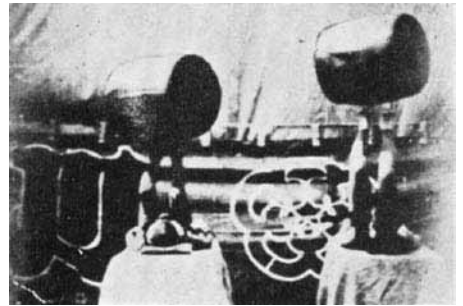
【図2】

[出典]

- ・ 明治32年 浅野四郎氏撮影の神田開花楼芸妓の手踊「布ざらし」
田中純一郎「日本の映画技術史に関する覚え書 其の1 撮影機の第一着」『映画技術』1942年11月
- ・ 明治三十二年浅野四郎氏撮影の芸者手踊「布ざらし」
田中純一郎『日本映画史』第一巻(斉藤書店、1948年) 口絵頁
- ・ 芸妓の踊り
筈見恒夫『写真 映画百年史』第1巻(鱗書房、1954年) p.7
- ・ 日本製映画の第一回興行、「芸者の手踊り」(明治三十二年六月)
田中純一郎『日本映画発達史 I』(中央公論社、1957年) p.66
* 同じ著者の『日本映画発達史 I』(中央公論社、1975年および1980年)にも同一の図版あり
- ・ 「芸妓の踊り」 浅野四郎による最初の興行映画
『キネマ旬報臨時増刊 目で見える日本映画の六十年』(1958年) p.16
- ・ 明治32年に小西写真機店が撮影した最初の興行用映画
『あゝ活動大写真 グラフ日本映画史 戦前篇』(朝日新聞社、1976年) p.23
- ・ [浅野四郎が 後に撮った芸者手踊り
小林源次郎「私の映画史」『グラフ三多摩』第25号(1980年1月1日) p.20
- ・ 柴田常吉撮影の芸者の舞踊(明治32年)
田中純一郎『活動写真がやってきた』(中央公論社、1985年) p.69

【図3】 展覧会出品時のタイトルは「浅草江川一座」(「大塚氏作品」)。記録写真(「映画法実施記念 映画報国展覧会」)を見る限りでは8コマ程度が残存していたようである。

阿久根巖『浅草の見世物 元祖玉乗曲藝大一座』(ありな書房、1994年)によれば、江川一座(大夫元・江川亀吉)は玉乗などの曲芸で明治の見世物興行に一時代を画し、浅草の清遊館(のち明治34年末以降は大盛館)を常打ち小屋にしていたが、震災後は興行街の変化から取り残され姿を消した。写真の背景と同じ垂れ幕を、同書掲載の写真(p.117)の中にも見ることができる。



【図3】

【出典】

- ・曲芸
菅見恒夫『写真 映画百年史』第1巻(鱗書房、1954年) p.7
- ・曲芸 製作年度不詳
『キネマ旬報臨時増刊 目で見る日本映画の六十年』(1958年) p.16

展覧会出品資料のうち、以下のものについては文献の中に対応する図版を見つけることができなかった。ここに掲載しているのは、「映画法実施記念 映画文化展覧会」の記録写真からフィルム齧の「拡大写真」を抜き出したもので、不鮮明ではあるが現在入手できる唯一の素材となっている。

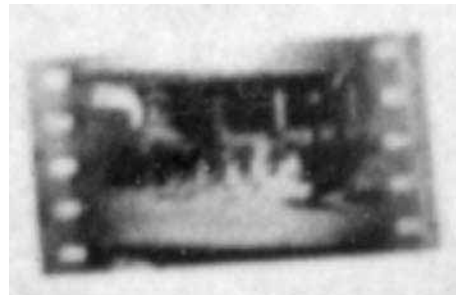
【図4】 展覧会出品時のタイトルは「隅田川」(「大塚氏作品」)。記録写真を見る限りでは8コマ程度が残存していたようであるが詳細は不明。



【図4】

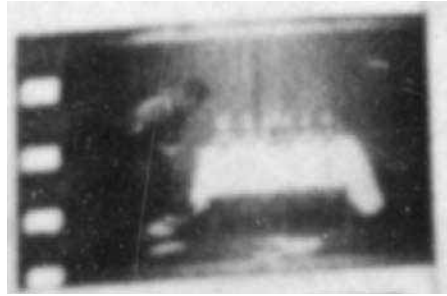
【図5】 展覧会出品時のタイトルは「浅草観音」(「大塚氏作品」)。記録写真を見る限りでは7コマ程度が残存していたようである。日本橋のフィルムとならび、「浅草の観音様」のフィルムも浅野四郎が最初に完成させたフィルムの一つとされている。また明治座の番組表には下記のタイトルが含まれているが、上記写真のフィルムがこのときのものなのかどうか、現時点では判断できない。

「浅草仲見世」



【図5】

【図6】 展覧会出品時のタイトルは「奇術」(「大塚氏作品」)。記録写真を見る限りでは6コマ程度が残存していたようである。浅野の談話には手妻(手品)のフィルムに関する次のようなエピソードが登場するが、それがこのフィルムのことを指しているのか、さらに慎重な調査が必要である。



【図6】

手妻は出来た写真を当時寄席に出ていた手品師の朝日マンマルが見てビックリ、種を教えてくれと店まで来たことがありますよ。つまりトリックなんです、洋服を着た人物が大風呂敷を他人に掛け、やゝあつてパツと風呂敷を取ると人物が消えているという仕掛で(止め写しを応用した訳で、これぞ日本最初のトリック写真である)してな。小西惣次郎さんがこれをうまくやりましたよ。そんな画を寄席などで見せた事がありました。

浅野四郎の談話。小林源次郎「活動写真回顧談」『映画史料』第七集(1962年10月)

【図なし】

展覧会出品時のタイトルは「ある舞台面」(「柴田常吉氏作品」「明治三十二年撮影説」)。このタイトルだけは展覧会の記録写真に「作品齣」も「拡大写真」も確認することができないため、詳細は不明である。

【図7】 筈見恒夫『写真 映画百年史』第1巻(鱒書房、1954年)には、「これが日本で最初に撮影された映画である」と解説された写真の中に【図1-3】と並んで1点だけ説明の無い【図7】の図版があるが、展覧会の目録と記録写真から、「リュミエール会社技師ペール(ガブリエル・ヴェール)の「ドーヴァ海峡の荒浪」であることが判った(ただし、いずれかが裏焼きだったようで左右の構図が反転している)。記録写真を見る限りでは3コマ程度が残存していたようである。



【図7】

「最古の日本映画」からは話題がそれるが、『映画テレビ技術』191号(1968年7月)にも「ルミエールのシネマトグラフ・カメラで撮影した農村風景のポジ片」が図版入りで紹介さ

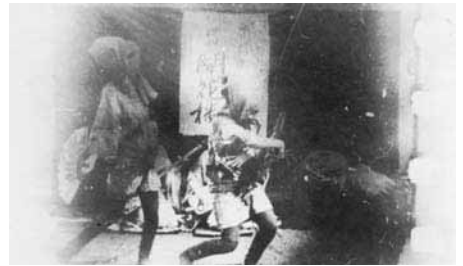
れている。持ち主は日本映画テレビ技術協会の技術史委員だった島崎清彦であるが、内容は展覧会に出品されていた「東京附近の農村」(記録写真を見る限りでは3コマ程度が残存していたようである)と同一であるから、あるいは中村正俊から素材を譲り受けたものかも知れない。同誌によれば、このとき「数コマ」あったフィルムは既に「風化寸前」であったため、早速複写が講じられたが「ポシ片の枠を外し、プリントのため押えたとたんにバラバラとなってしまう、かろうじて中央の1コマが無傷のまま救われた(佐伯啓三郎「技術史をまとめはじめて……」)という。

B. 文献に掲載されたその他の写真図版(1)

以下は、映画史文献に掲載されている写真図版であるが、展覧会出品の資料には対応するものが見あたらない。しかし、明らかに既出の図版と同じ背景で撮影された映像も含まれていることから、そもそも展覧会に出品された作品は当時残存していた資料の一部であった可能性も考えられる。

【図8】 背景に「開花楼」の文字。すなわち【図2】と同じ場所で撮影されたものである。既に触れたように、「講武所では『勢獅子』を撮りました。『布ざらし』も撮りました」という浅野の証言がある。また、演劇研究家の児玉竜一氏によれば写真に写っている演目も明らかに「勢獅子」であり、このとき撮影されたものである可能性が高い(ただし、田中純一郎はこれを「柴田常吉撮影」としている)。

なお、講武所の「勢獅子」「布ざらし」については、公開時期を特定する資料が塚田嘉信により発見されている。それは、本郷春木座(明治32年8月11日-25日)の興行を伝える明治32年8月12日付都新聞の記事で、その中に「従来の写真の外数寄屋町芸妓の薩摩踊り講武所芸妓の勢獅子布晒し等も差加へたりと云ふ」という記述が見られる。『映画史料発掘』(1974年4月) p.343を参照。



【図8】佐藤忠男氏所蔵の紙焼写真(田中純一郎旧蔵資料)より複写

[出典]

- ・柴田常吉撮影の芸者の舞踊(明32)
- 田中純一郎『日本映画史発掘』(冬樹社、1980年) p.64
- ・柴田常吉撮影の芸者の手踊り(明治32)
- 『世界の映画作家31 日本映画史』(キネマ旬報社、1976年) p.5
- ・『芸者の手踊り』(浅野四郎撮影、一八九九)
- 佐藤忠男『日本映画史I』(岩波書店、1995年) p.97

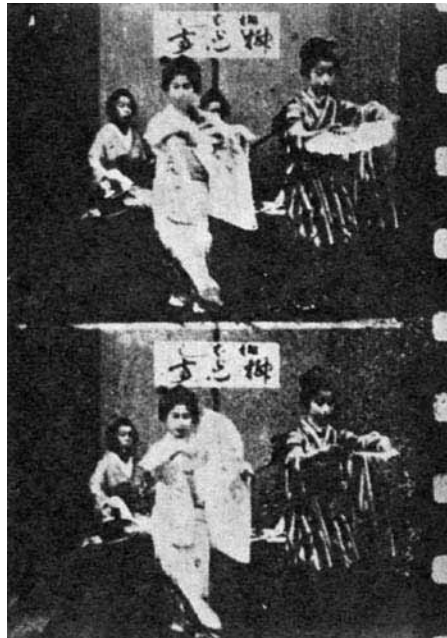
【図9】 背景の文字は判読しにくいが、場所は後で取り上げる【図14】と同一である。従って「柳光亭」と書かれたものであろう。柳光亭は両国(現在の台東区)の柳橋にあった料理店。浅野の談話に「柳橋では松づくし。下谷では元禄花見踊勢獅子。柳橋では柳光亭、下谷では松源で撮りました」とあるが(小林源次郎「活動写真回顧談『映画史料』第七集、1962年10月)、明治座の番組表には「柳橋の部」として次の2つが記載されている。

端唄松し(立花家小静、地方若松家なつ、上総家やを)

元禄花見踊(小若松家喜代治、新中の家よし、地方若松家なつ、上総家やを、鳴物内田家柳子)

田中純一郎の「日本の映画技術史に関する覚え書 其の1 撮影機の第一着」は、これを「元禄花見踊」とみなしている。

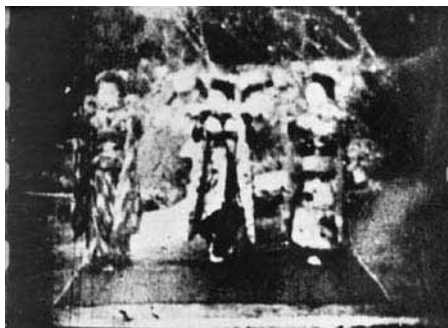
【図10】 これも、様々な映画史文献で紹介されよく知られている図版であるが、解説に「祇園芸妓」とあるのは、明治座の番組表に含まれている「京都祇園の部」のフィルムを指しているようにも思われる。芸妓の手踊りを写したフィルムの中では、ただ一つ背景に撮



【図9】

[出典]

- ・明治32年 浅野四郎氏撮影せる柳橋柳光亭芸妓の手踊「元禄花見踊」
- 田中純一郎「日本の映画技術史に関する覚え書 其の1 撮影機の第一着『映画技術』1942年11月
- ・[キャプション無し]
- 田中純一郎「定稿 日本映画史『映画評論』1947年5月1日
- ・芸者の手踊り
- 『別冊一億人の昭和史 昭和日本映画史』(毎日新聞社、1977年) p.23



【図10】

[出典]

- ・祇園芸妓の手踊り(1897)
- 筈見恒夫『写真 映画百年史』(鱗書房、1954年) p.6
- ・京都祇園芸者の手踊り(明治32年頃撮影)
- 『キネマ旬報臨時増刊 目で見る日本映画の六十年』(1958年) p.18
- ・Gion Geisha, 1898.
- The Japanese Film: Art and Industry* by Joseph L. Anderson and Donald Richie, Charles E. Tuttle Company, 1959, p.105.
- ・明治30年、撮影機の輸入により写真師柴田常吉が撮影した「祇園芸者の手踊り」(実写)
- 『日活五十年史』(日活株式会社、1962年) p.72

影場所の記載が無く、印刷の画質も極端に劣っているが、どのような経緯で入手、掲載に至ったものであろうか。

C. 文献に掲載されたその他の写真図版(2)

以下は、明治33(1900)年4月7日に小西本店が発行した『写真月報』第7巻第56号の口絵頁に掲載されているもので、「小西本店撮影 活動写真画」として4コマずつ6種類の図版が紹介されている。廣目屋が日本映画の興行を始めた翌年の資料という意味でも貴重である。



【図11】

【図11】 小西六刊行の『写真とともに百年』など後年の文献に掲載された図版は『写真月報』からの複写ではないかと思われる。

他の古写真との比較で、背景の建物は日本橋の三井呉服店(現在の三越)本店であることが判る(『大三越歴史写真帖』大三越歴史写真帖刊行会、1932年 等を参照)。なお、越後屋が屋号を三井呉服店に改めたのは明治29年。明治33年にはそれまでの座売を全廃して本店全体を陳列場として開場することになる。

従って、このフィルムが明治座の番組表にある「日本橋首街」であった可能性もある。また、塚田嘉信『映画史料発掘』(1974年2月)によれば、名古屋御園座の興行(明治32年9月30日-)を報じた扶桑新聞(9月27日付)に下記のタイトルを見ることができる(p.312)

日本橋通り三井店繁昌の光景

[出典]

- ・小西本店撮影 活動写真画
『写真月報』第7巻第56号(1900年4月7日)口絵頁
- ・日本最初の映画「日本橋の鉄道馬車」
菊池時雄『日本のカメラ発達史 第1章5・日本最初の映画撮影技師』『写真工業』1965年10月号
- ・映画「日本橋の鉄道馬車」
『写真とともに百年』(小西六写真工業、1973年) p.94
- ・浅野四郎撮影の日本初の映画「日本橋の鉄道馬車」(明治30年)
亀井武編『東京都写真美術館叢書 日本写真史への証言(下巻)』(淡交社、1997年) p.153

【図12】『写真とともに百年』掲載の図版は『写真月報』からの複写ではないかと思われるが、同書のキャプションに「芳町芸妓による『元禄花見踊』」とあるのは、どのような根拠によるものであろうか。写真の背景に「花月楼」の文字が見えるが、花月楼は京橋区竹川町(現在の中央区銀座7丁目)にあった料理店、すなわち、浅野らが初めて芸妓の手踊りの撮影を行ったという場所である。以下に浅野四郎、柴田常吉それぞれの談話を並べてみよう。

浅野の談話。「広目屋の秋田柳吉[創業者の秋田柳吉。引用者註]と云う人と“頗る非常”の駒田好洋氏が、活動写真を小西で写したと云う事を聞きつけて、その機械やフィルムが買いたいと云う話が出て来ましてね。しかし此の人達は小西の様にカメラを売るのが目的じゃなくてうつしたのを見世物みたいに興行する事が目的なんですから、お客が入りそうな物じゃなくては困る。だから、ためにどんな物が出来上るか、それによって機械を買うと云う事になり、その試作品が方々の芸者の手踊なんです。[中略]そこで最初にうつしたのが新橋の芸者の『鶴亀』で花月の庭でうつしたんですが、本番迄が大変です。まず座敷に縄をはって、写る範囲を決めて、そこで一流の芸者でも、フィルムの長さは決ってますから、ぴったりはまる様におどらせるんです。たしか『月宮殿の』の辺りからだったと思います。踊る芸者は、いつもより白くぬめてもらい庭に畳なんかをひいてやはり縄を張り、後に『花月』と書いた屏風を立まはしてやったものです。小林綾子記述「日本で最初の映画製作 大塚四郎氏に訊く」『NACSA NEWS』第6巻第6号(1955年11月)。

柴田の談話。「初めは新橋花月楼で、おえん、お悦の『花月の四季』を作り、小竹の『背戸の段畑』を撮りましたが、いづれも成功でした。小西の主人も大変喜んで呉れまして、それ



【図12】

[出典]

- ・小西本店撮影 活動写真画
- 『写真月報』第7巻第56号(1900年4月7日)口絵頁
- ・浅野四郎撮影(芳町芸妓による「元禄花見踊」)
- 『写真とともに百年』(小西六写真工業、1973年) p.94

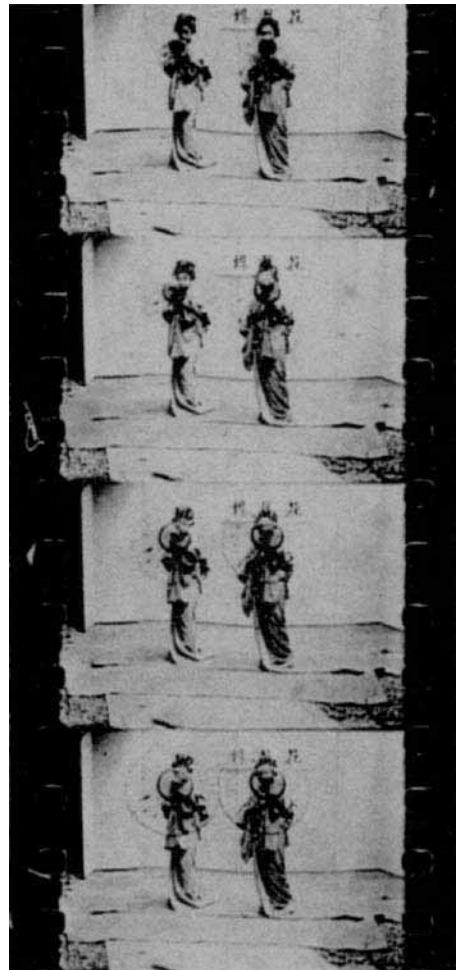
からは東京市内の、銀座や浅草の雑踏、鉄道馬車の走る所などを撮影したのです(田中純一郎「日本の映画技術史に関する覚え書 其の2 撮影技手、柴田常吉」『映画技術』1942年12月号)。

これらを見ると、浅野も柴田も花月楼で撮影をしていたことになる(が、塚田嘉信が指摘しているように浅野談には柴田が、柴田談には浅野が出てこない。『映画史料発掘』p.325)。二人が同じ現場に居合わせたのか、それとも花月楼での撮影は一度ではなかったのか定かではないが、上記の談話を素直に信じれば「鶴亀」を浅野が、「花月の四季」「背戸の段畑」を柴田が撮影したことになる。

なお、明治座のプログラム「新橋の部」にはそれらを含めて下記の5つが見られる。

長唄花月の四季(蔦小松家おえん、沼田家おえつ、地方福松家すま子、新川村家小蝶)
紅葉の檣(武蔵家あたり、福中村家六助)
長唄鶴亀 蔦小松家おえん、翁家小いな、松の家おえつ)
新鹿子(日の家ぼたん、沼田家兼子)
端唄背戸のたん畑(鈴木家小竹)

【図13】 背景に「花月楼」の文字。【図12】と同じ時に撮影されたものと思われる。ところで、塚田嘉信『映画史料発掘』によれば、明治32年6月27日付読売新聞が歌舞伎座の活動写真(6月20日-7月5日)を紹介した中に「同会に於ては更に新柳二橋の名妓を撮影して週日内には観客に紹介する由にて」の記述が見られる。また7月9日付同紙にはドイツ皇弟ハインリッヒ親王殿下の活動写真御覧の記事があり、その中に「柳橋新橋芳町杯(など)の芸妓手踊りの活動写真は非常に御満足に思召されたる由」の記述が見られる(以上、p.303)。すると、いわゆる芸妓手踊りのフィルムの撮影は、(かねて伝えられてきたように廣目屋による最初の日本映画の興行に際して行われたものではなく)この時点で初めて行われたもの



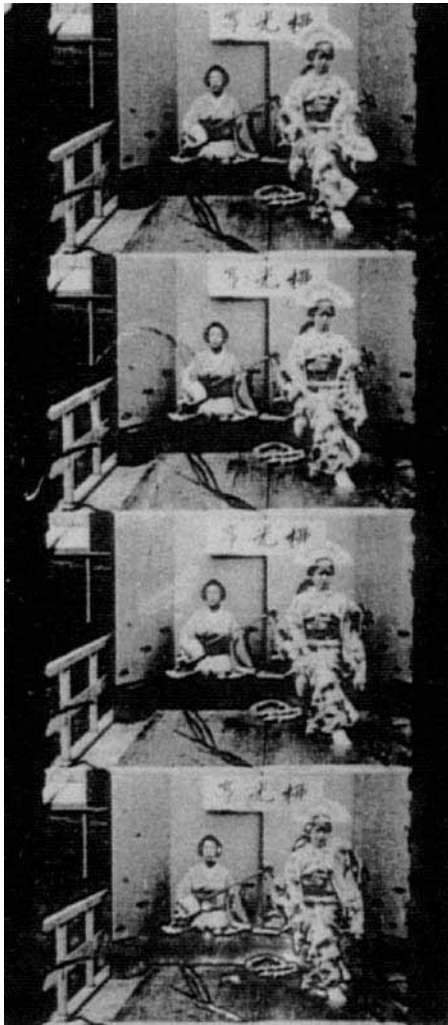
【図13】

【出典】
・小西本店撮影 活動写真画
『写真月報』第7巻第56号(1900年4月7日)口絵頁

だろうか。なお上記のフィルムが予告通り「週日内」に、すなわち歌舞伎座の興行で追加上映されたのか、あるいは明治座の興行で初めて公開されたのかは不明である。

【図14】 背景に「柳光亭」の文字。【図9】と同じ場所だが、文字の書体が異なるため、別の機会に撮影されたようである。

【図15】 『日本写真史への証言』など後年の文献に掲載された図版は『写真月報』からの複写ではないだろうか。



【図14】

図14 :[出典]
・小西本店撮影 活動写真画
『写真月報』第7巻第56号(1900年4月7日)口絵頁



【図15】

『写真月報』第7巻第56号(1900年4月7日)口絵頁
・浅野四郎撮影の「芸妓の手踊り」
菊池時雄「日本のカメラ発達史 第1章5・日本最初の映画撮影技師」『写真工業』1965年10月号
・浅野四郎撮影「芸妓の手踊り」(明治31年)
亀井武編『東京都写真美術館叢書 日本写真史への証言(下巻)』(淡交社、1997年) p.153

図15 :[出典]

・小西本店撮影 活動写真画

背景に「濱町岡田」の文字が見られることから日本橋区(現在の中央区日本橋)浜町の料理店、岡田で撮影されたものであることが判る。塚田嘉信『映画史料発掘』によれば、明治32年7月8日付東京朝日新聞に明治座の興行を伝える記事があり、「昨日まで歌舞伎座にて興行せし活動写真を来る十日頃より一週間許り興行する事となり写真も新橋柳橋芳町等の芸妓連の踊り数番を撮影して加へる事となり。一昨日築地の柳花苑浜町の岡田等にて写真したりといふ」と書かれている(p.303)。つまり、7月14日から同じ浜町の明治座で始まる興行にあわせて撮影されたことが判る。明治座の番組表でこれに関係すると思われるのは「芳町の部」として記載された次のタイトルである。

かつぼれ(浜田家五郎、萬屋小千代、三輪屋錦糸)

【図16】 背景に「濱町岡田」の文字。【図15】と同様、明治座の興行にあわせて撮影されたものであろう。報知新聞の番組表ではそれらしいタイトルを確認することができないが、その後名古屋御園座で行われた興行(明治32年9月30日-)を伝える付扶桑新聞の記事(9月27日付)に「頗る非常宴会の図」というタイトルがあり、また同じ興行の観覧記(10月3日付)に「浜町岡田の粋、酒盛」と書かれているので、同じフィルムが巡回したものではないかと思われる。塚田嘉信『映画史料発掘』pp.312 - 313。



【図16】

[出典]

・小西本店撮影 活動写真画
『写真月報』第7巻第56号(1900年4月7日)口絵頁

D. 当時の新聞に記載されたその他のタイトル

以上、ここまでは現存する写真図版をもとに、《最古の日本映画》に関する情報の整理を試みてきたが、当時の新聞記事や関係者たちの談話には、既に触れたものの他にも様々なフィルムタイトルや撮影時のエピソードが散見されるので、まとめて紹介しておきたい。まずは、当時の新聞から情報を拾い出してみよう。

[1]「京都祇園の部」 明治座の興行から

潮来出しま(祇園町一力楼まさ子、かよ)

道成寺(同小きみ、久鶴、勝龍)

明治座の番組表には「京都祇園の部」として、上記2つのタイトルが並んでいるが、浅野や柴田の談話は京都の撮影には触れていないため、これらを誰が撮影したのか、しばしば議論の対象となってきたところである。

田中純一郎は『日本映画発達史 I (1975年)』の中で「『潮来出しま』『道成寺』は白井が、撮影した」と記している(p.75)。この「白井」とは、浅野四郎の戦前の座談会で存在が明らかになった白井勘造のことで、白井は大阪の菓子舗、廣井堂の主人であったが、本業のかたわら活動写真の趣味に没頭し「大阪市内の実写や、京都辺の風物をいろいろ撮影した(p.76)」といわれる。ただし、田中が1942年に廣井堂を訪ねたときには既に白井は他界しており、そのフィルムも散逸していたため、確実な裏付けはとれていない(「この間まで、故人の撮影したフィルムが丸い罐に入って、土蔵の中にしまっていたが、子供たちが切りきざんで遊ぶにまかせ、いまはその名残りもない、とのことだった」田中純一郎「秘稿日本映画 第8回『キネマ旬報』397号[1965年8月下旬号] p.42)。

一方、より古くから関西方面の日本人映画カメラマンとして有力視されていたのが、明治の写真師で、光村印刷の創業者としても知られる光村利藻である。吉山旭光の『日本映画界事物起源』(「シネマと演芸」社、1933年)には次のように書かれている。「最初此の撮影機を扱つたのは光村氏で、『京都芸者の潮来』『車屋に水をかけて喧嘩』『撃剣』などを撮つた。既に見た『映画法実施記念 映画文化展覧会記録』の記載も同じ説を採用したものであるが、1940年に光村と面会した田中純一郎は、本人の証言を紹介しながらこれらに反論している。「京都の芸妓踊や、撃剣の場面などを撮つたということですが」と、[光村に]重ねて質問すると、『それは何かのお間ちがいでしょう』ということであった(「光村利藻のこと『キネマ旬報』1954年7月下旬号[96号]旬報さろん p.76)。ただし田中は光村について、この他にもいくつかの文章を書き残しており、以下のように、その都度内容にも微妙な変化が見られる。

「その時小西の店員は、柴田氏と共に、光村邸で『撃剣』の場面とか、京都迄出かけて『祇園』の花柳情緒と云つた風のものを二三種撮影して見せた(「日本の映画技術史に関する覚え書 其の1 撮影機の第一着』『映画技術』1942年11月)。

「光村氏のお話はこうだ。 たしかに小西から、活動写真のカメラを持ってきたことはあります。そして試験的に、自分の家の庭で撃剣をるところなど、二、三十種は撮影したが、カメラは買わなかった。祇園芸者の踊りは、私も二、三種とりましたが、その頃、南禅寺下に住んでおられた鹿島清兵衛さんではなかるうか(『秘稿日本映画』第8回『キネマ旬報』1965年8月下旬号[397号])」。

「光村氏は、“左様、神戸の私の家へ小西から珍しい器械が入ったといってゴーモンの活動カメラを持ってきたことがあり、試験的に家の庭で撃剣やら何やら2、30本とりましたが芸者の舞踊は知りません。カメラはついに買いませんでした。ああいうものは興行者用で家庭用には向かないと思ったからです。私のうつしたヒルムはそのまま小西へ渡しましたからその後どうなったか知りません”(『輸入カメラ第1号』考『映画テレビ技術』1970年12月号[220号])」。

[2] 「器械到達の初めに撮影せしもの」 歌舞伎座の興行から
大坂道頓堀の図
大坂舞子の踊り

繰り返しになるが、現在の時点で日本映画初公開当時の番組を知る手がかりとなっているのは、明治32年7月の明治座の興行を伝える報知新聞の広告であり、それ以前の6月に本郷中央会堂や歌舞伎座で行われた興行については番組の詳細を知ることができない。ところが、塚田嘉信『映画史料発掘』によれば、6月の歌舞伎座の興行を報じた読売新聞(6月27日付)には次のような記述が見られる。「写真中大坂道頓堀の図は器械到達の初めに撮影せしものにて大坂舞子の踊りは之に次ぐもの」。これらの事実関係も、いまのところ明らかにされていない(p.327)⁵⁾。

[3] 御当地芸妓の活動写真 その後の巡業と新写真

再び塚田嘉信『映画史料発掘』から。廣目屋の活動写真は明治32年7月14日から31日にかけて明治座で興行を行った後、主流と支会に分かれ各地で巡業を続けることになる。その主流は同年のうちに横浜蔦座、本郷春木座、赤坂演伎座、名古屋御園座の4か所を巡回したことがわかっているが、そのつど地元の芸妓などを撮影した新写真が追加されている。東京近辺はともかく、名古屋のような遠方の場合には巡回先で現像や焼付の作業を行ったのだろうか。いずれにしても、撮影から仕上げまでの技術が飛躍的に進歩している様子をうかがうことができる。

同地名妓の手踊り等をも撮影して縦覧せしむる由
8月1日 - 横浜蔦座の興行に際して(8月1日付中央新聞より、『映画史料発掘』p.309)

数寄屋町芸妓の薩摩踊り

8月11日 - 25日 本郷春木座の興行に際して(8月12日付都新聞より、『映画史料発掘』p.343)

【図8】の解説でも触れたように、上記の記事に「従来の写真の外数寄屋町芸妓の薩摩踊り講武所芸妓の勢獅子布晒し等も差加へたりと云ふ」という記述が見られる。

清元梅の春(赤坂林家千代、同糸い、春本せきや、同小吉、三味線は林屋三助、春茂登小若、歌は春本春子、林屋りん子)筈

9月1日 - 24日 赤坂演伎座の興行に際して(9月10日付中央新聞より、『映画史料発掘』p.310)

赤坂演伎座のフィルムについては、9月9日付都新聞にも関連記事があり当時の状況をよく伝えている。「赤坂演伎座にて興行中なる活動写真では金春を始めとして葎町柳橋其他の芸妓が得意の踊を写して赤坂拍子に見物させるより同地田町三丁目の春本林家の両家は残念がり土地の芸妓ばかりヌキにされては何だか不見点揃ひの踊一つも出来ない安物だと見侮られる様で寝覚が悪いから此の土地からも踊を持込んでオホンと威張つてやらうではありませんかと発議し永田町二丁目伊藤源次郎方に連中を寄せて種々相談の上踊は清元梅の春といふ題にて春本より半玉せきや、小浅林屋より栄、千代又た三味線は林屋より三助、りん子春本よりお若、春子都合八名を折り抜き赤坂見附下の写真師柴田常三郎[柴田常吉のことと思われる。引用者註]へ頼んで撮影せしめ是を演技座の座元へ持込む筈なりと(『映画史料発掘』p.343)。

日本剣士撃剣の図

名古屋盛栄、廓連、等芸妓の舞踏

9月30日 - 名古屋御園座の興行に際して(9月27日付扶桑新聞より、『映画史料発掘』p.312)

日本上の黒塗

同上(10月3日付扶桑新聞より、『映画史料発掘』p.313)

「日本剣士撃剣の図」というのは光村利藻の談話に登場する「撃剣」と同じものであるうか。

また、10月3日付扶桑新聞の観覧記には「日本上の黒塗」というタイトルが見られるが、これは「日本映画で最初の喜劇」と呼ばれる「書生の黒塗、ベンチの悪戯」のことを指すものと考えられている(田島良一『稲妻強盗』の製作年代をめぐって『日本大学芸術学部紀要』第17号[1988年])。吉山旭光によれば本作は「明治三十二年夏、赤坂溜池の演伎座に出演の新演劇伊井一座の下に居た横山運平、新井信夫などが、赤坂山王下の伊藤

弥次郎氏邸の庭を利用して新派映画の最初『ピストル強盗清水定吉』を撮った序に「作ったもの(『日本映画界事物起源』「シネマと演芸」社、1933年)であり、また「ピストル強盗清水定吉」(一説に「稲妻強盗」)は、日本で作られた最初の劇映画ともいわれている(『日本映画発達史I』)。なお、ここに出てくる「伊藤弥次郎」は上記赤坂演伎座の興行に際し芸妓の撮影に関わった「永田町二丁目伊藤源次郎」と同じ人物であろうか。

E. 関係者の証言に登場するその他のタイトル

以下は、浅野四郎やその他の小西関係者が生前に残した回想の中だけで確認されているフィルムの情報である。

角兵衛獅子

杉浦宗 日本橋には鉄道馬車が通つてみた。

杉浦千 あの角兵衛獅子を寫したのはいつだつたかな

大塚 それは後です。

「四十年前の撮影機と撮影を訊く」『キネマ旬報』702号(1940年1月1日)

そこで試験的に少々写して見ました(店の前に来た角兵衛獅子を写したが、フアインダーを見そこなつて足だけしか写らなかった)。[中略]其あと日本橋を写しました。

浅野四郎の談話。小林源次郎「活動写真回顧談」『映画史料』第七集(1962年10月)

「角兵衛獅子」の撮影が行われたのは「日本橋」の撮影よりも後だったのか、前だったのか。浅野らの記憶にもぶれが見られるが、浅野の戦後の談話によれば「角兵衛獅子」は撮影機の到着後、端尺を使い撮影から現像、焼付までの作業を試験的に行う中で撮影されたもので、「日本橋」の撮影はこれらの成功を踏まえて行われたものとされている。

上野の汽車

品川の海岸

一番初めに撮影したものは、本店近傍(当時は小西商店と称す)の「日本橋上の鉄道馬車」二番目は「角兵衛獅子」三番目は「浅草観音堂の鳩」でした。其後もしばしば撮影を行いまして「上野の汽車」「品川の海岸」といつたものを撮り、その結果手品のトリック撮影にかかりました

杉浦千之助談「映画昔話 日本橋に発祥した活動写真」『東京案内第一集 日本橋』(東京案内出版社、1953年)

杉浦千之助は戦前の座談会で「田端の汽車の着く所を撮つたのも早い方だつたらう。」(「四十年前の撮影機と撮影を訊く」『キネマ旬報』702号[1940年1月1日])と述べているが、これは上記「上野の汽車」と同じフィルムを指すものだろうか。

魚河岸

その頃撮したものは日本橋、まだ鉄道馬車の通っている時です。その馬車が通るんだの魚河岸だの、写しました。

・小林綾子記述「日本で最初の映画製作 大塚四郎氏に訊く」『NACSA NEWS』第6巻第6号(1955年11月)

化け地蔵

死人の蘇生

杉浦千 其頃作つた劇は八太永次郎さん(小西六の外国係)の書いたシナリオで「化け地蔵」とか「死人の蘇生」とかいふものだつた。

「四十年前の撮影機と撮影を訊く」『キネマ旬報』702号(1940年1月1日)

大塚 白井といふ大阪の菓子屋さんがいましたが、これが活動狂で、それに芝居気のある男でして、「死人の蘇生」には自ら和尚さんの役を買つて出ました。「死人の蘇生」といふのは、棺桶に蓋をして拜んでから、それをかついで歩き出すと、底が抜けて死人が出て来て生きかへる。それで和尚さんが驚いて逃げ出すといふ筋です。

杉浦千 八太さんが死人になつてかついだのは君(杉浦宗次郎氏)と店の小林だつた。

「四十年前の撮影機と撮影を訊く」『キネマ旬報』702号(1940年1月1日)

泥棒

大塚 書生が勉強して居るうちに寝つてしまふと、窓から泥棒がはひる……

杉浦六 書生が僕、泥棒が……

杉浦千 小林。

大塚 目が醒めてとつ組み合ひになる。そんなものを撮つたのです。場所は小西の裏。勿論野天でやつたのです。

「四十年前の撮影機と撮影を訊く」『キネマ旬報』702号(1940年1月1日)

其時分に赤坂田町に住む写真師で柴田常吉と云う人が店へよく出入して居りましてな。[中略]先々代からこの男に映画の技術を教えてやれとの命がありまして、柴田君をすつかり仕込んでから32年10月に店を去りました。柴田常吉は私がやめてから団十郎と菊五郎の紅葉狩を写しました。映画と私との関係は切れたわけではありませぬ。[中略]店はまた店で、芝居のようなものを写してみようと、店の裏手で、死人の蘇生とか、泥棒とか、手妻(手品)だとかを撮りました。

浅野四郎の談話。小林源次郎「活動写真回顧談」『映画史料』第七集(1962年10月)

自転車競争 丸太の芸

自転車競争や丸太の芸を写しましたが、画がハッキリ止つて写つて居るところがありました。

浅野四郎の談話。小林源次郎「活動写真回顧談」『映画史料』第七集(1962年10月)

石原正敏と云ふ人が五尺の高い下駄を穿いて歩くの 戻り橋

上記は小路玉一『活動写真の知識』(誠文堂書店、1927年)に記載されている。同書は浅野四郎を初めて詳しく紹介した書物として知られており、これらも浅野本人への取材を通して書かれた可能性があるため参考までに関連の箇所を抜粋しておく(p.328)。

最初は角兵衛獅子や、石原正敏と云ふ人が五尺の高い下駄を穿いて歩くのや、と云ふ様なものであつたが、角兵衛獅子の如きは、見当外れで足だけしか撮つて居なかつた事もあつた。朝日漫丸を驚かした手品の映画から、進んでは小西の主人六兵衛氏を主役とした映画劇も作り又新橋花月のポンタ、おゑん等の長唄「鶴亀」「戻り橋」等、柳橋芸妓の「松づくし」下谷芸妓の「勢獅子」これは今尚名妓として羽振りを利かして居る八重さん、おしゆんさんが演じたものである。

おわりに：《最古の日本映画》と日本映画史

以上、本稿では日本映画のルーツをたずね、当時どのようなフィルムが撮影され、あるいは公開されたのか、可能な限りの情報を集め整理を試みた。これまで様々な文献を通して散発的に紹介されていた図版や資料をあらためて一望してみることで、かつて存在したフィルムのイメージや、個々のフィルムを特定するための手がかりを多少なりともつかむことができたのではないかと思う。

しかし、既にみたように、これまで取り上げてきたフィルムの中には、新聞広告のような記録のみを通してかろうじて確認できるタイトルや、関係者の記憶によってようやく存在が明らかになったタイトルもあり、また一方では、それらのいずれにも登場しないフィルムの写真図版だけが残されているケースも見られるなど、依然として《最古の日本映画》と考えられてきたものの総体がつかみにくいことも事実である。そもそも、小西本店の映画づくりはどの程度の期間にわたって行われ、どのくらいの数のフィルムが製作されたのであろうか。

一般の映画史では、日本製活動写真の初公開に続くトピックとして、柴田常吉による「稲

妻強盗」(一説に「ピストル強盗清水定吉」明治32年9月)や「紅葉狩」(同年11月頃)の撮影、土屋常二による大相撲の活動写真(明治33年4月)や「鳩の浮巢」(同年7月)の撮影、また吉澤商店が柴田常吉らを派遣して行われた北清事変の従軍撮影(明治33年7月)や、藤原幸三郎らを派遣した日露戦争の従軍撮影(明治37年3月)などを取り上げていくのが通例である。従って、小西本店による映画づくりも、このような通史的、発達史的な文脈の「最初を飾る」トピックとしてのみ扱われる傾向があり、その後の消長についてはほとんど注意を払われることがないのが実情であろう。

浅野四郎本人の証言によれば、彼が小西の店を離れるのは、柴田常吉の「紅葉狩」が撮影される直前の明治32年10月である。従って、浅野が直接映画の撮影に関わっていたのは撮影機が到着した明治30年10月の前後から約2年間のことであったと考えることができる。ところが、浅野の発言は彼が小西を離れた後も、同店で映画の撮影が続けられていたことを示唆している(「店はまた店で、芝居のようなものを写してみようと、店の裏手で、死人の蘇生とか、泥棒とか、手妻(手品)だとかを撮りました。」、また、これと関連して、『写真月報』にも興味深い資料が残されている。明治33(1900)年4月7日発行の第7巻第56号(すなわち「小西本店撮影 活動写真画」の口絵が掲載されていたのと同じ号)には小西の自社広告「幻燈活動写真器械」があり、そこに「日本画数種アリ」と書かれているのが注目されるが、翌明治34年2月28日の第8巻第61号では、同じ広告のこの部分が「日本画数十種出来」に、また明治34年4月20日、第8巻第63号の広告「活動写真器械」では「最新の面白き内国画 澤山出来」へと変わっていくのである。これらは、小西本店が明治34年以降も日本映画のストックを増やしつつあったことを示唆するものであろう。

一方、明治33年4月の時点で、小西が保有する「日本画」のストックが本当に「数種」しかなかったのか。『写真月報』の口絵に掲載された「活動写真画」6点や、報知新聞に掲載された明治座の上映番組だけを見ても、「数種」という表現はどこか控えめなもののようにも映るし、あるいはその後、明治32年中に公開された芸妓の手踊りを見ても、それらが当時“御当地芸妓の活動写真”として急速に数を増していた様子がうかがわれるからである。このあたりは、小西本店のストックの中に「販売促進用」に選ばれたものとそうでないものがあつたのか、あるいは廣目屋との協力関係ができて以降は小西が「撮影」したもので、「発注者」である廣目屋に帰属するフィルムがあつたのか、よくわからない。また、田中純一郎が浅野四郎を訪ねた際には、明治32年6月に小西から廣目屋へ撮影機1台が売り渡されたことを示す古いノートが残されていたというが(田中純一郎「秘稿日本映画 第8回」p.42)、従ってそれ以降は小西のストックと廣目屋のフィルムが別々に増えていった可能性も視野に入れておく必要があるように思われる。

さて、日本映画がいよいよ本格的に量産体制を整えるようになるのは、明治41(1908)年以降四つの映画商社(後に日活へと統合される吉澤商店、横田商会、Mパター商会、福宝堂)が次々と撮影所を開いてからのことであるが⁽⁶⁾、これらは活動常設館(専門の映画

館)の成立という当時の背景と切り離して考えることができないだろう(日本初の常設館として浅草電気館が開館するのは明治36年。二番手の神田新声館、三番手の浅草三友館が開館して本格的な常設館の時代が到来するのは明治40年)。だが、それよりも前に、小西本店が(撮影機や映写機の販売に即して)フィルム・ストックの整備を進め、あるいは廣目屋が(巡業という興行形態に即して)コンスタントな映画作りの仕組みを発達させていたとすれば、そこには(いかに原始的なものであれ)既に映画産業の最初のモデルが姿を現していたと考えるべきなのかも知れない。

いずれにしても、《日本映画のルーツ》を再検証する作業は始まったばかりであり、まだまだ多くの謎が残されている。これから徐々にでも、その全体像を明らかにしていきたい。

[謝辞]本稿の執筆にあたっては芝綾子氏、佐藤忠男氏、小野民樹氏、田島良一氏、戸田桂氏、児玉竜一氏、碓井みちこ氏のご協力を得ました。記して感謝いたします。

付記

本稿執筆中の2008年7月1日から8月3日にかけて早稲田大学演劇博物館で「ニッポンの映像 写し絵・活動写真・弁士」展が開かれた。展示品には、廣目屋の活動写真興行で説明などを行い中心的な役割を果たした駒田好洋の遺品が多数含まれており、いくつかの資料は本稿の調査にも新たな手がかりを与えてくれるものであった。その一つは「芸者の手踊り」フィルム齎で、「長唄 勢獅子」「お兼さらし」の2種が出品された(同展図録p.27を参照)。どちらもフィルムの齎(それぞれ2コマ)を厚紙の台紙に挟んだもので、台紙にはコマの解説と拡大写真が付けられている(台紙には「初めて邦人の作った日本映画の(二)」「初めて邦人が作った日本映画の(三)」と書かれているので、当初は3点以上が存在していたと考えられる)。資料の形態は戦中の展覧会に出品されたフィルム齎ともよく似ており、また「勢獅子」の拡大写真は本稿で紹介した【図8】、「お兼さらし」の拡大写真は【図2】展覧会に「芸妓の布晒し」として出品されていた資料)と図柄が一致している。

もっとも、戦中の展覧会に出品された資料と今回の資料をよく比較すると、(拡大写真の図柄は同じでも)フィルムのコマ数や台紙のつくりには明らかな相違が見られるため、これらの資料の関係はまだはっきりしていないが、今回の資料が明治期の上映プリントの一部であれば大変貴重である。以下は台紙に記載された解説である(表記に疑問のある場合も訂正を加えずそのまま転記した)。

初めて邦人の作った日本映画の(二)

カメラ 仏国ルミコル式

撮影 東京 浅野史郎

時 明治三十一年

原料材料サービス 小西六本店

演者 講武所 春の家 おこひ 小丸

出物 長唄 勢獅子

封切 本郷春木座 今の本郷座

説明 駒田好洋

初めて邦人が作った日本映画の(三)

カメラ 仏国ルミコル式

撮影 浅野史郎 東京

時 明治三十一年

原料材料サービス 小西六本店

演者 講武所 雜伎連

出物 お兼さらし

封切 本郷春木座 今の本郷座

説明 駒田好洋

もう一つは、廣目屋の卒先日本活動写真会が明治32年頃の興行で使用した辻ピラで、そこに当時の上映番組が挿絵付きで紹介されている(図録p.25を参照)。全部で22点ある挿絵のうち、9点までが「日本写真(日本映画)に関するものであり、そのいくつかは、図柄や出演者の解説などが、明らかに本稿で取り上げた写真図版や明治座の広告(報知新聞 明治32年7月13日付)の記述と対応している。本稿で取り上げた写真図版の中には舞踊の演目などを完全に絞り込むことができないものがあったが、今回の資料によって以下を特定することができた(タイトルの表記は明治座の広告による)。

【図9】=「元禄花見踊」

【図12】=「長唄鶴亀」

【図14】=「端唄松尽し」

【図15】=「かつぼれ」

なお、この辻ピラには【図11】と対応する「三井呉服店繁忙の真景」、【図16】と対応する「頗る非常なる濱町岡田宴会」の挿絵も見られる。また、「背戸のだん畑」、「都下有名剣客撃劔」、「紅葉の橋」(以上、辻ピラの表記)の挿絵は、いずれも写真図版が残されていないため貴重である。

註

(1) 旧来は明治32年6月の歌舞伎座の興行(6月20日-7月5日)をもって「日本製活動写真の最初の公開記録」(田中純一郎『日本映画発達史I』)とみなすのが通例となっていたが、塚田嘉信によれば、それよりも早く本郷中央会堂の興行(6月13日-17日)を報じた東京朝日新聞(6月15日付)の記事に「今回[中略]従来いまだ無かりし日本画をも加へるにぞ評判甚だ宜しといふ」という記述が見られる。塚田嘉信『映画史料発掘』(1974年) p.301。

(2) 旧来は歌舞伎座(6月)の広告として、明治座(7月)の広告とそっくりの資料を紹介する例が多く見られたが、その後出典とされる広告の現物が確認されていないことなどから、これも誤って伝えられた情報と考えられている。塚田嘉信『映画史料発掘』(1974年) p.306。

- (3) なお、現存するリュミエール社のフィルムにはコンスタン・ジレル、ガブリエル・ヴェールが日本を離れていた時期に撮影されたと思われる莫都三十年祭(明治31[1898]年4月)のフィルムが含まれており、これらを柴田常吉の撮影によるものとする説もある。詳細は古賀太「カメラが捉えた日本『明治の日本』から『リュミエール映画日本篇』へ」吉田喜重、山口昌男、木下直之編『映画伝来 シネマトグラフと 明治の日本』(岩波書店、1995年)ならびに『日本映画技術史年譜 No.19』『映画テレビ技術』241号(1972年9月)を参照。
- (4) 大塚(浅野) 四郎と小西本店関係者の座談会や懐旧談を採録した記事には以下のものがある。
- 1 「四十年前の撮影機と撮影を聞く」『キネマ旬報』702号(1940年1月1日)、出席者は大塚四郎、杉浦六右衛門(小西六社長)、杉浦千之助(同専務)、杉浦宗次郎(同取締役大阪支店長)、青地忠三(小西六)、中村正俊(小西六)、田村幸彦(キネマ旬報社)、水町青磁(キネマ旬報社)。
 - 2 杉浦千之助談「映画昔話 日本橋に発祥した活動写真」『東京案内第一集 日本橋』(東京案内出版社、1953年)、後に『映画史料』第十五集(梅村与一郎、1966年1月)に転載。
 - 3 小林綾子記述「日本で最初の映画製作 大塚四郎氏に聞く」『NACSA NEWS』第6巻第6号(1955年11月30日)、1955年4月に小西六本社で行われた座談会の採録。出席者は大塚四郎、杉浦千之助、青地忠三、池上信司、小林源次郎、小林綾子。
 - 4 小林源次郎「活動写真回顧談」『映画史料』第七集(梅村与一郎、1962年10月)、(3)の座談会を当時の録音テープから新たに採録したもの。
- (5) また、塚田嘉信によれば、本郷中央会堂に「従来いまだ無かりし日本画」が現れる以前にも、日本映画の興行が行われた可能性を示唆する資料が散見されるが、いずれも事実関係は明らかにされていない。詳細は『映画史料発掘』pp.326-327を参照。
- (6) 明治期に刊行された吉澤商店の定価表には、小西製のものと思われるフィルムの情報が掲載されている。以下は『第十五版 明治三十八年十二月改正 幻燈器械及映画並ニ活動写真器械及附属品定価表』の「美人踊り之部」より。

松づくし	六十五尺	金 十九円五十銭
道成寺	四十尺	金 十二円
新鹿の子	五十五尺	金 十六円五十銭
布晒し	七十五尺	金 二十二円五十銭
花月の四季 新橋おさん、おさん	三十五尺	金 十円五十銭
勢獅子	六十五尺	金 十九円五十銭
背戸のだん畑	三十八尺	金 十一円五十銭
紅葉橋	三十八尺	金 十一円五十銭

これらがどのような経緯で吉澤商店の定価表に並んでいるのかは不明であるが、各フィルムの長さや値段に関する記述が目立つ。ちなみに、『写真月報』に掲載の広告「活動写真器械の到着」によれば、小西本店が輸入した生フィルム1巻の長さは「七十尺」である。なお、これらのフィルムの原版は、他の吉澤製のフィルム原版などとともに日活(吉澤商店、横田商会、Mパター商会、福宝堂が合併して大正元年に創立)に移り、大正12年の関東大震災による向島撮影所の被害で消滅したものと思われる。

The Earliest Japanese Movie — Motion Pictures Produced by Konishi Honten

Irie Yoshiro

In October 1897, Konishi Honten, now Konica Minolta Holdings, Inc., announced that it had imported motion picture camera, it is believed, Baxter & Wray (U.K.). It is said that subsequently Asano Shiro, the employee entrusted with handling the equipment after it arrived, was the first Japanese person to successfully film, develop and print a movie. In addition, Hiromeya, which at the time had enjoyed success with the screening show using Vitascope (U.S.), was spurred by this to show a motion pictures produced in Japan and began this screening enterprise in June 1899. However, the film materials of those movies filmed by Konishi Honten and shown by Hiromeya are lost to us now. Furthermore, even remaining documentations are limited, making it difficult to prepare an accurate list or describe the individual contents of early movies in detail.

All the discourses to date concerning the beginnings of Japanese cinema are based on documents such as newspaper articles and advertisements from that time and transcriptions based on the reminiscences of Asano and other Konishi Honten employees. This paper aims to verify the early Japanese cinema by studying the photographic plates of the film said to have been made by Asano and others, and cross referencing the aforementioned two types of written sources of information.

Although photographs of subjects such as scenes of Meiji period city streets and geisha dancing can be seen frequently in earlier studies on old movies, they receive almost no attention in research on cinematic history of today. However, a fresh study reveals records showing that frames from film shot by Asano, Shibata Tsunekichi and other early cameramen were exhibited at a 1939 cinema exhibition. Therefore, it can be assumed that those plates appeared in various studies were duplicated from these frames. Furthermore, it is believed that these frames were uncovered during the course of interviews with those cinematic pioneers who were still around at the time.

Photographs collected from the studies of the past show that there are actually quite a number of variations present in, for example, plates of film simply labeled geisha dancing. One sees different features in the implements held by the geisha and the background scenes, respectively. Furthermore, the background includes the name of the restaurant where the film was shot, which is greatly useful in specifying individual plates.

In writing this paper, photographic plates, which had been sporadically used in past studies, were collected to the greatest extent possible. Their contents were analyzed and they were compared with film appearing in newspaper articles and testimony by the people involved at the time the film was shot, in order to verify facts such as their title, cameraman, filming location, date of showing and screening venue.